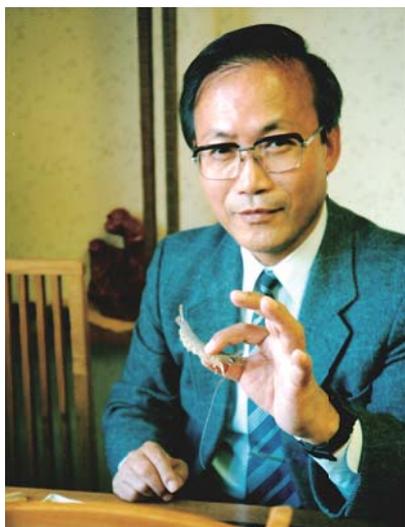


丸山 有成 名誉教授ご逝去



先生が56歳の頃のお写真

略歴

昭和10年1月28日出生
 昭和34年 東京大学理学部化学科卒業
 昭和36年 東京大学大学院理学系研究科修士課程修了
 昭和36年 東京大学物性研究所 教務員
 昭和37年 東京大学物性研究所 文部技官
 昭和38年 東京大学物性研究所 助手
 昭和42年 理学博士（東京大学）
 昭和47年 お茶の水女子大学理学部化学科 助教授
 昭和55年 お茶の水女子大学理学部化学科 教授
 昭和59年 分子科学研究所分子集団研究系 教授
 平成7年 分子科学研究所 名誉教授
 総合研究大学院大学 名誉教授
 平成7年 法政大学工学部物質化学科 教授
 平成17年 法政大学 定年退職
 平成17年 法政大学マイクロ・ナノテクノロジー研究センター
 客員教授
 平成26年10月30日 永眠 享年79、瑞宝中綬章受賞

丸山 有成先生を偲んで 緒方 啓典（法政大学生命科学部 教授）

丸山有成先生と私の出会いは、私が大学院修士課程を修了し、総合研究大学院大学の学生として丸山先生の指導を受けた時から始まります。当時の私は、物理的概念に基づき新たな物質を設計し、その機能を制御できる可能性をもった化学の分野に大きな魅力を感じ、当時錯体化学実験施設にいらした池田龍一先生を頼って分子科学研究所を訪問し、いくつかの研究室を見学させて頂きました。その際に、初めてお会いした丸山先生は、現在進歩が著しい有機エレクトロニクス分野の基礎となる有機半導体に関する多くの先駆的な研究を井口洋夫先生とともに行うなど、当時から大変著名な先生でしたが、有機物に限らず特異な電子物性を示す様々な固体や、超薄膜化による物性制御など、新しい研究に積極的に取り組まれており、全くの門外漢であった私の意見に熱心に耳を傾け、様々な貴重な助言を頂きました。その後、私を総合研究大学院大学博士課程学生として温かく迎えて頂き、自由に研究をする機会を与えて下さいました。当時の丸山研究室は、助手の稲辺保先生、技官の星肇さん、数名の総研大生をはじめ、国内外の多数の研究者が頻繁に研究室を出入りしており、大変活発で明るい雰囲気の研究室でした。丸山先生は、研究所運営や、諸外国との研究交流の促進等で、超多忙な仕事をこなしつつも、周りの研究者やその家族への心遣いも常に忘れられず、研究者や学生が安心して研究できる環境を提供できる様、常に配慮されていました。また、超多忙のスケジュールの合間を縫って、早朝や深夜にご自身で手を動かし実験を行うなど、現役研究者としての姿勢も示されていました。私は大学院修了後、分子集団動力学研究部門に赴任された宮島清一助教授の元で助手として採用され、丸山研究室の隣に居を移しました。その後、丸山先生は平成7年に分子研を定年退官され、法政大学に移られましたが、私も縁あって平成13年度より法政大学に採用され、再び丸山研究室の近くに自分の研究室を構えることとなりました。法政大学での丸山先生は、多くの雑事の合間を縫って、連日大学の門が閉まる夜の11時過ぎまで、様々なタイプの学生を相手に分け隔てなくマンツーマンで粘り強く教育および研究指導を行い、多くの学生を育てて来られました。また、生死にかかわるいくつかの重い病氣と戦いながらも、人に対しては常に穏やかな姿勢で接せられており、丸山先生の驚異的な精神力の強さに驚かされることが度々ありました。平成17年の法政大学定年退職時の最終講義では、法政大学での10年間に行った研究のみに話を絞り、ご体調が優れない中、全力で講義をされていたことが深く印象に残っています。丸山先生は一貫して、どのような状況にあっても平常心を保ち、静かで根気強く、かつ強い熱意で研究に取り組まれており、丸山先生の研究に対する真摯な姿勢に私はいつも励まされてきました。

丸山有成先生のご冥福を心よりお祈りいたします。

分子研に丸山研ができたころ 稲辺 保 (北海道大学大学院理学研究院 教授)

私が丸山研の助手に着任したのは1984年の8月でした。丸山先生が分子研に転任されたのはその年の2月で、お茶大から2名の美人女子学生を引き連れて来られたので、当時の分子研の若手男性にとってはセンセーショナルな出来事だったようです（その内の1名は、現在東大物性研で活躍されている森初果教授です）。丸山先生は分子集団研究系（分子研発足時の研究系の一つ）の第一期計画の最後の部門である「分子集団動力学研究部門」に着任し、1995年3月までの約11年間、初代教授を務められました。単身赴任は本望ではなかったと思いますが、スバルのバンでの週末の東京往復ドライブを楽しんでいるようにも見えました。このバンを我々は「すし号」と呼んでいましたが（寿司屋の出前の車に似ていた）、荷物を運ぶときの威力は素晴らしく、私が赴任したときの大量の段ボール箱（アメリカからの引っ越し）を公務員宿舎まで運んでもらった時（その上、重い段ボール箱を、階段を上って運ぶのを手伝ってもらった時）、教授の先生にこんなことやってもらっていいんだろうかと、非常に恐縮したことを覚えています。その後、若手スタッフや学生が困っているときにも、気軽に何でも引き受けてくださる様子を見て、相手の身分・立場によって対応を分け隔てるのがまったくない心優しい人なんだと、感心していました。また、遊び心も旺盛で、部門の英語名が「Molecular Assemblies Dynamics」だったことから、略称の「MAD」をこよなく愛していた点も印象深いです。野球も大好きで、走るのが遅かったですがバッティングのセンスは光るものがあり、野球大会での野次られながらも奮闘する姿は愛すべき存在でした。

丸山先生は、「仕事の鬼」というイメージではなく、楽しく研究をやっていたという雰囲気でした。しかし、分子研発足からまだ日が浅かったため、実績を上げるために様々な用務に駆り出されていた点は、傍から見ても気の毒で、本来の希望であった研究三昧の生活にはなかなか入り込めなかった感じです。他の教授の先生方も大変な毎日を過ごされていたことは重々承知していますが、分子集団研究系のボス（というより分子研設立の立役者）で、1987年に所長になられた故井口洋夫先生の片腕という存在だった丸山先生には、特に難題が降ってくる頻度が高かったような気がします。私も本来、研究室の助手として丸山先生をサポートすべき立場だったのですが、先生の抱える難題は私のような学生に毛が生えた程度の未熟者には近寄ることもできませんでした。その分、研究面でサポートをしっかりとっていたかと言われると、（自分が主体的に関与するテーマに関しては研究成果をあげようと努力はしていましたが）丸山先生の大切にしている高価な実験装置を使いこなせるまでのレベルに達することができなかった点はちょっと心残りです。また、分子研の使命である海外の研究機関・研究者との緊密なコネクション作りに丸山先生が奮闘していたときにも、あまり手助けできなかった点は申し訳なかったと感じています。丸山先生は、長良川の鵜飼いに外国からのお客さんをよく連れていってました。

そんなわけで休日にも休む暇なく活動し、平日は分子研の将来のために骨身を削っていた丸山先生の健康状態は、周りの人間にとって常に心配の種でした。幸い分子研在任中は入院するほどの大事はなかったのですが（ただし、健康診断の結果は要注意マークがいっぱい付いていたようです）、退職後に何度か病院のお世話になっているとの情報は入ってきました。それでも法政大学のハードな勤務をしっかりと勤めあげている様子を耳にして、弱音を吐くことがあっても、根は丈夫なんだなと思っていました。そんな風に思っていたので、今回の訃報はある意味衝撃でした。いくつもの障害を乗り越えてきた丸山先生でしたが、やはり天命があることを再認識しました。

最後に、思い出に残っている写真を披露します。何年かは忘れてしまったのですが、井口先生の号令で分子集団研究系の懇親会を職員会館の二階の和室（今では和室の存在はほとんど忘れ去られていると思いますが）を借りきって行ったときの集合写真です。前列中央にどっしりと構えている井口先生とは対照的に、丸山先生は最後列右端に遠慮がちに写っています。これから分子研を益々もり立てようと全員意気盛んだった頃の懐かしい写真です。

